

天使が住まうところ

牧師 山本 護

よく晴れていたけれども、北風が強く吹いてことのほか寒い晩秋の午後。集会所の漆喰壁でカマキリがじっとして動かない。頸のあたりが錆びはじめている雄で、自分を食してくれる雌との邂逅を待っているのでしょうか。痩せ細った体ですが、秋の陽を浴び、身体とその影で二四分の生贄となり、いよいよ生涯を仕上げようとしています。

「北風に吹かれ蠖螂二四分」。写真なしには読み解けない欠損句ですが、スマホがこれだけ普及している今日では、かろうじて可(優良可の内)で取ってもらえるか。しばらく見つめてみると、唯一動く三角頭に埋め込まれた複眼でウィンクされ、北風の中で一緒に立ち尽くしている者同士の共感を覚えました。漆喰を地に敷いて、どちらが身体でどちらが影か、見分けがつかなくなりかけている午後。いくらか質量を感じる生涯は此岸、そしてその影は彼岸。それがいよいよ統一されようとしていました。



R.M.リルケ(1875~1926)はこう記しています。「真の生命の姿は二つの領域にまたがっており、この二つの領域をつらぬいて、もっとも大きな血の循環が行われています。此岸(この世)もなければ彼岸(あの世)もありません。あるのは大きな統一体です。そこにわたしたちを凌駕する存在、[天使]が住まわっているのです(書簡集)」。リルケの影響なのか、あるいは直接の関連ではないにしても詩人を憧憬するまなざしによるものなのか、漆喰壁のカマキリの生命に二つの領域を見ていました。「北風に吹かれ蠖螂二四分」。

「わたしは確信している。死も、命も、天使も、支配するものも、現在のものも、未来のものも、力あるものも、高い所にいるものも、低い所にいるものも、他のどんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことはできない(ロマ 8:38~39)」。

死も、命も、生と死の境界に住まわる天使も(書簡集)、時の支配も、「神の愛から、わたしたちを引き離すことはできない」。神の愛との結びつきは、大きな統一体のようなものなのでしょうか。聖句以外の言葉で言い換えることは控えたいのですが、うっすら近いものだと予感します。「どんな被造物でも=カマキリ」が、生と死にまたがっている真の生命の姿であるように。Ω